

自然の中で 野外教育情報

2021 第 14 号 ◆今号の特集◆ 「天気のはなし」

令和3年9月15日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

「降水確率」～何%で雨は降る?～

平野 有海 (気象予報士 NHK総合ニュース7気象解説担当)

今年5月、NHK 連続テレビ小説「おかえりモネ」の放送が始まりました。海の近くで生まれ育ったモネが、山林での仕事を通して、気象予報士という資格に興味を持つ…という物語です。ドラマの中で「山は水を介して空とつながっています。海もそうです。」という台詞があります。アウトドアの舞台である山や海を知ることは、空や天気を知ることに繋がっているのだと思います。

さて、このニュースレターが発行される夏は、アウトドアに関わる皆さんにとっては繁忙期ではないでしょうか? 雪上キャンプ好きの私の父・吉直に言わせると年中繁忙期のようなのですが、それはさて置き、アウトドアをする際に気をつけたい気象情報について書かせて頂きたいと思います。

まず、キャンプなどの日程が近づいてきた時、皆さんが確認するのは「週間予報」ではないでしょうか? この週間予報には、天気マークや気温の他に、気象庁では「降水確率」も記しています。さて、この降水確率、いったい何%なら雨の想定をしますか? 私は、降水確率 30% 以上であれば、雨への心構えをします。「え? たった 30%?」という声が聞こえて来そうですが、これには理由があります。降水確率というのは、予報対象地域の平均値が計算されています。そうすると、アウトドアの大敵、局地的な雷雨などは捉えにくく、数字が低めに出てしまうのです。例えば、「東京」なら、千代田区の上空は降らず、アウトドアが盛んな奥多摩で降る場合でも、それらの平均値が「東京の降水確率」として表現されているわけです。特に山に近い地域では、湿った空気が山にぶつかり雨雲が発達しやすくなりますので、降水確率の数字を過小評価すると痛い目に合うことがあります。

では、そういった局地的な雷雨の兆候は、降水確率以外からも見つけることはできるのでしょうか? 私がよく使うのは、気象庁が公開している「雨雲の動き」です。1 時間後までの雨雲の予想をつぶさに観察することができます。あと何分くらいで雷雨になるのか、いつ頃に雨雲が抜けるのか、精度の高い情報を得ることができます。

そして、雨が止んだ後は、太陽に背を向けて、反対側の空を見上げてみてください。もしかしたら、綺麗な虹が皆さんを迎えてくれるかもしれません。



● 平野 有海 (ひらの ゆうみ) 幼少期を海や山に囲まれて過ごす。早稲田大学を卒業後、テレビ静岡に入社。趣味のダイビングと潜水士の資格を生かし、海中レポートなどを担当。自然災害の現場を取材する中、気象の世界へと興味を持つ。現在は、気象予報士として、人を天災から、自然を人災から守るため活動中。

国土交通省 (気象庁) 「雨雲の動き」



山の天気との化かし合い



丸 誠一郎

大学山岳部コーチ時代、年間目標を学生と話し合うと、大概是「厳冬期の〇〇岳」のピークを獲りたいという話になります。その実現のためには、どういう実績を積み、十一月の荷上げまでどう山行計画を練るべきか、熱弁を交わします。しかし、最近は「冬山＝遭難死」という保護者の皆様の、誤った先入観からか「家（うち）の子は、医者にするために医学部に入学させました。ヒマラヤサミッターにさせるためではありません」と、お叱りを受けることが少なくありません。

こうしたお電話は、2009年7月のトムラウシ山の大量遭難、2012年5月の医師パーティーによる白馬岳遭難事故以来、雪山蔑視へと変わり、何故この手の遭難が身近に起こってしまうのか、気象遭難の分析を欠いた報道が、指導者を一層悩ましています。自身も雪山に長く慣れ親しんでいると、いくら多くの遭難報告や文献を読んでも、「自分は死なない」と云う驕りがあることは否めません。

2015年12月21日夕刻、私の指導の下で出発した「屏風尾根からスバリ岳」慶應医学部山岳部隊が、屏風尾根最上部にて雪崩に遭遇、将来有望な二年生一名を失いました。彼とは、2018年にブータン未踏峰への挑戦を約束していました。この日、針ノ木岳上空には雪雲が停滞、しかし風向は日本海を通過した寒冷低気圧の南側に入ったため終始西南西風で、雲粒なし角柱結晶（推測）は弱層を造り始めました。事故後の十六時ごろから風向は西北西から北西風に変わり、冬型に変化しました。松本防災ヘリの救助隊の隊員は、「この事故は避けられなかった」とはおっしゃいましたが、入山前に「此のことは、もう一度念を押しておけば…」この事態は避けられたかも知れない、と今でも悔しさが込められます。

私は、初心者を連れて毎年御殿場ルートから夏の富士山に登ります。その際、「NHK ラジオの気象通報で、地上天気図を描き、明日の頂上天候を予想します。富士山小屋周辺ではスマホで、ほぼあらゆる気象情報は取得でき、「登山天気 tenki.jp」等を利用すれば、剣ヶ峰の週間天気まで表示されています。この天気予報アプリの殆どが、数値予報を元に自動的に計算させた天気予報を使っています（「山の天気にだまされるな！」猪熊隆之著）。つまり、長年富士山を歩いて経験してきた「この低圧部、怪しいよね」的な予測は、自身の天気図でしか見抜けないのです。多くのツアー登山も、山麓や数値予測を自動化した予報から、大惨事を招いた事例が公表されています。

気象予報も、GPS も、自然には勝てない脆弱さは常に残ります。その1%以下の隙間に自然の驚異が入り込み、尊い命が奪われているのです。私は、此の事をスマホ世代にも伝えていく義務があると信じ、毎月山に登りつづけています。



● 丸 誠一郎 [まる せいいちろう]

ニューベリービジネスコンサルティング株式会社取締役、
(公) 日本山岳・スポーツクライミング協会会長

1954年生。東京都出身。クレディ・スイス証券会社他、27年間投資銀行に在籍。高一から夏山縦走に親しみ、大学山岳部において積雪期中心のオールラウンド・アルパイン・スタイルの経験を深めた。80年、日本ヒマラヤ協会ガルワールヒマラヤ遠征に参加。ケダルナート・ドーム（6831m）登頂。母校山岳部コーチ、慶應義塾大学「山岳」講師を歴任。趣味はアイアンマンレース。

海での「天気」との付き合い方



菅田 斉

大海原をフィールドに、ダイナミックなマリンスポーツや無人島・海辺での自然体験活動を通じて青少年のシーマンシップを育む。1968年開設以来、そのコンセプトを実践し続けているYMCA阿南国際海洋センターは、自分自身の生命を守ると共に、パートナーの存在を意識し合い、互いの生命を守り合あうことで、生命の尊さを理解し、尊重し合う姿勢を育む安全教育を基本としています。そして、私たちスタッフは、海に出ているすべてのキャンパーや指導者の安全を確保しながら、海の持つ魅力を伝える役割を担っています。

海での活動の安全を確保する上で、とても重要な要素が「天気」です。船舶に関する技術的・知識的なことは、トレーニングを重ね、乗り越える力を身につけることができて、「天気」は操作することができません。操作するのではなく、その「天気」にあった展開を考え、判断することが求められてきます。だからこそ、風向き、雲の流れ、空の様子など、海ではその変化に敏感になることを常に心がけています。また、今はその場で最新情報を収集できるツールをフル活用しています。天気の変化・気温・風向きや強さ・雨や雷雲の最新情報は、手元のスマホですぐに入手でき、しかも分刻みの予測を確認することもできます。

自分で感じ取る変化とツールから得られる情報とあわせて、重要なのは対象者の理解です。前の団体のときには30分で無人島へ渡ることができたからといって、今回の団体もその時間を見込んでおけばいい、というわけにはいきません。年齢や体力、時間帯による気温の変化や潮汐による流れの違い、暑さから来る疲れ具合など、ここでも天気の影響が密接に関係してきます。目の前の状況から得られる情報もとても重要です。

このように、多くの客観的情報と積み重ねてきた経験と感覚から、変化し続ける天気の中でも安全に活動ができるように判断をしています。



安全を守り、海の魅力を伝え続けています！

私のこの判断の根幹に、大切にしている考え方があります。それは、私がこの海で仕事を始めた当時の上司の言葉、「臆病であれ！」です。決して自分の力や経験を過信したり、自然を侮ったりしてはいけません。また、危険回避に対する判断は、躊躇なく、その瞬間、その場で行わなければなりません。

以前このような状況がありました。約100名がカヌーやカヤックに乗って活動をしている中、雷雲の接近の可能性が出てきました。約1時間後には、このエリアにその雷雲がかかりそうな予測が出たので、私は全員が上陸して建物の中に入ることが完了するまでの時間を逆算し、順次上陸していくように指示を出しました。全員の上陸を確認した後、私自身も上陸し、全員が屋内に待避することができました。雷が鳴り始めてから動き出しているのは遅いのです。この時は、全員が待避完了しましたが、雷雨が散ったので空振りのケースになりました。でも、それはそれでいいのです。

得られるすべての情報と経験をもとに、最悪のケースを想定し、勇気をもって安全を確保する判断を行うこと。私は、これが決して操作することのできない「天気」と上手に付き合い、豊かな活動を守り続けていくために必要なことだと考えています。

● 菅田 斉【かんだ ひとし】

公益財団法人大阪YMCA YMCA阿南国際海洋センター 所長

1978年生まれ、大阪府出身。学生時代より大阪YMCA ユースボランティアリーダーとして活動。海・山・スキーなどの野外・キャンプ活動、バスケットやサッカーなどのスポーツ指導に携わる。2001年大阪YMCAへ奉職、2008年よりYMCA阿南国際海洋センターへ着任、2013年より現職。

「晴れも雨も、良い天気！」



北澤 良太

私のキャンプ人生において、雨天のシチュエーションが非常に多くありました。しかしながら、改めてふりかえると、雨から学んだことの多くが今に活着ていると感じています。



良い天気と悪い天気

雨男時代の私は、なぜ自分のキャンプはこうまで晴れないのかと正直悩んだこともありました。そんな時に、たまたま目にした1冊の本に、「良い天気と悪い天気」の話が記されていました。

「今日は良い天気だね」、「今日の天気は悪そうだ」という、一見日常生活によく耳にしそうなこのフレーズ。しかし、その言葉は、聴く人にとって天気の影響を変えさせてしまうものだという内容。これを読んだ当時の私にとっては、すんなりと腑に落ちる内容でしたので、それ以来、天気に対して「良い」「悪い」と表現することをやめて、様々なキャンプを行ってきました。



雨が大好きな子どもたち（森のようちえん）

3歳～7歳までの子どもたちを対象とした、森のようちえんでのエピソードです。

移動中も遊び時間として捉えるため、目的地の自然公園に行くことを忘れて、駅から公園までの道のりで活動時間の半分以上を過ごすことも多々ありました。そんな森のようちえんの子どもたちは雨が大好き。なぜなら、雨の日には、普段は履けない長靴やお気に入りのカッパを着ることができるから。そして何よりも、水遊びが大好きだからです。とは言え、濡れたり汚れたりすることを避ける子どもたちもいますが、誰かが先陣を切って水たまりへ入っていくとついつい目で追ってしまうものです。そして、その姿から目をそらすことのできなかった子どもたちは、間違いなく水たまりへ引き寄せられて行きます。さらに活発な遊び方になると、大屋根の雨どいから流れ落ちる雨水をビニール袋に集めたり、滝行の様に頭から水を被って全身で雨を楽しむ子どもまでいました。体調管理として、その後の着替えや保温ができることが前提とはなりますが、準備さえできていれば雨でも思いついて遊ぶことができます。



夕立からの野宿体験（長期自然学校）

2週間ほどの長期宿泊キャンプで実施した野宿体験のエピソードです。



～夕立をきっかけに～

ブルーシート、シュラフ、行動食、水、その他個人装備を持って山へ上がります。夕立の降る可能性が高かったのでスケジュールを早めて行動していましたが、結局大幅に遅れて野宿地へ到着。その後、一息入れる間もなく土砂降りの雨が降り始めます。早々にタープテントを張り、夕立をなんとかやり過ごします。その間、ギューギュー詰めのタープテントの中は、雨音で大声を出さないと隣の人の声が聞こえないほどの状況でしたが、なぜか子どもたちはみんな笑顔。むしろ元気過ぎるほどで山道での疲れはどこへ行ったのか。誰かが歌い始めると全員で大合唱になり、気づいたら雨が上がっていました。水汲みや設営を済ませ、夜の森に打ち解けて静かに過ごしていると、雲が開けて満天の星空が広がりました。この場にいた全員にとって、1つ1つの思い出が鮮明に刻まれた野宿となりました。



まとめ

生活と天気は常に隣り合わせです。毎日表情を変える天気だからこそ、私たち人間にとって様々な刺激やきっかけを与えてくれるものだと思います。その中でも、雨や荒天時は特にチャンスだと思い、どこまで自然の刺激を受け入れることができるかを考えます。とは言え、参加者や運営スタッフの命を預かっている身なので、当然無理は禁物です。しかし、工夫次第では、記憶に残る体験へと結びつく可能性があります。私自身、晴れを求めたい日もありますが、雨が降ったからと言って下を向くことなく、その時の状況に応じて柔軟に自然体験を楽しく意味のあるものとして提供できる指導者でありたいと考えています。

●北澤 良太【きたざわりょうた】

NPO 法人湘南自然学校 ディレクター

1986年東京生まれ。子どもたちを対象とする自然体験活動を企画・運営しています。

風と雪の谷、大網。

天気のはなし



前田 浩一

お向かいに住む今年米寿を迎えるおばあちゃんは毎年、立春を過ぎる頃に決まってこう言います。

「大網のばかっ風は余寒に吹く」

長野県の小谷村と新潟県の糸魚川市の境にある大網集落。東に雨飾山、西に姫川、南に真那板山があって、季節を問わず強い風が吹きます。特に真那板山から吹き降ろす南風は強烈で、「窓ガラスが割れて吹き込んだ風に飛ばされた屋根が、隣の家を飛び越えた」「風に煽られて燃え広がり、集落の大部分が燃えてしまう大火があった」など、風にまつわる話を幾つか聞いたことがあります。最近では2016年にあった糸魚川市の大火。25メートル／秒を超える南風が吹き荒れ、火が北へどんどん燃え広がりましたが、あの日は大網でも朝から強烈な南風が吹いていました。

そんな大網では春になると、風を鎮めるために「雨飾代参」という行事を行います。毎年4月16日の春のお祭りの日に雨飾山にお参りする人を4人選び、選ばれた4人はお神酒やお塩、大網では「おんべ」と呼ばれる竹の棒の先端に紙垂（しで）をつけたものを持って、雨飾山がよく見渡せる場所へお参りに行きます。集落に戻ったあと、ひとりがおんべを背負って神社境内の杉の木に登り、その先端におんべをくくりつけます。おんべが上がったのを集落の人が見ると、「これで風が鎮まる」と安心します。もちろん、実際に風がすっかり鎮まる訳ではありませんが、「これまでずっと行ってきたことを、今年もきちんと行った」という事実とそれによる安心感は、日々自然と対峙しながら暮らしている私たちにとっては、とても大切なことです。

お向かいに住むおばあちゃんは、こうも言います。

「大網のばか雪は、半分になった」

豪雪地帯の小谷村。その中でも特に雪が多いと言われている大網。真冬には2メートルを超える積雪があり、来る日も来る日も雪かきや屋根雪掘り（大網では雪下ろしではなく、雪掘りと言



真冬の大網。遠くに雨飾山を望む。

います）をすることもあります。高齢化が進む大網では、もう自分が住む家の屋根雪を掘れない、そんな家も増えてきていて、私たち移住者が頼まれて代わりに屋根に上ることも多くなりました。常に危険と隣り合わせの屋根雪掘りですが、雪国で暮らし続けるためには避けては通れない仕事です。大網のお年寄りがいつまでもここで暮らし続けられるように、力になれることはできる限りやってあげたいと思っています。

そんな大網の雪も、おばあちゃんに言わせると、ずいぶん少なくなったそうです。昔は電線をまたいで歩いていたとか、冬は2階の窓から出入り、または道から雪の階段を何段も下って玄関にたどり着いたとか、今では考えられないような話がたくさんあります。そんな大量の雪も、春の日差しや温かな風で解けてなくなる。雪国の四季は変化に富んでいてとても魅力的です。

気象に左右されることの多い田舎、山間地での暮らし。大変なこともあります、その恵みもたくさんあり、自然に生かされていることを実感し、感謝する日々を過ごせることは、とても幸せなことだと思っています。

これからも私たちは雨飾山の神様に願い、日々精進しながらここ大網で暮らし続けます。

●前田 浩一【まえだこういち】

くらして代表

1970年生まれ、大阪出身、長野県小谷村大網在住

2000年に日本アウトワード・バウンド協会主催の冒険教育指導者育成プログラム（JALT）に参加し、その後2013年までOBJ長野校で勤務。2014年にくらしてを立ち上げ、つちのいえを拠点に「暮らし」の体験プログラムの提供、特産品の栃餅の製造販売、炭焼きや伐採などの山仕事などに携わる。

マイクロバスとキャンプソング



本間 岳

キャンプを運営する立場で考えると、天気は大問題だ。たいていの場合は、晴れていることを前提に計画を立てていて、雨が降ればプログラムを変更する必要が出てくる。個人的にも参加者目線でも、空が晴れ渡り、外で思い切り活動できるのが一番いいと思う。でも、雨が降った時にしかできない体験があるのも事実だ。雨の中、傘もささずに外で思い切り遊んでみる。雨上がりに、ドロドロになって泥遊びをしてみる。これらは、雨が降ったからこそできるものだ。

それに、計画どおりに、すべてがスムーズに進行してしまうのは、おもしろくないと感じることもある。イレギュラーなこと（子供のケガなどは別だが）が起きたときこそ、普通に考えていては出てこない発想が生まれたり、それによって今までしたことのない経験ができることもある。そんなときに、大切なのは「楽しもうとする気持ち」だ。

ある夏休みのキャンプの最終夜、グループ対抗のゲーム大会をやったあと、最後は外で花火を囲んで歌を歌う予定だった。しかし、ゲーム大会の終盤でいきなりの豪雨。もちろん、花火は中止になってしまった。宿舎までは徒歩3分ほどの道のりだったが、あまりの雨の強さに歩くことができない。急遽マイクロバスを持って

きて、子供達に乗ってもらった。

バスに乗るまでは怒濤の展開だったが、少し落ち着くと、花火ができなかった残念な気持ちでしょんぼり。

そんな時、一人のキャンプリーダーが「濡れちゃったけど、なんかこういうの楽しいな！このままここで歌を歌おう！」と言ってギターを弾きだした。あっという間に子供達は笑顔を取り戻し、外の豪雨も手伝ってテンションは上がり、車内は大盛り上がり。宿舎に着いても歌は終わらず、停まったマイクロバスの中で歌は続いた。

雨が降らなければこんな時間は生まれなかったと思うと、たまの雨も悪くはないと思える。また、何よりも「雨が降ってしまっただけで残念」では終わらせず、こんな状況でも楽しもうという姿勢を子供達に見せてくれたキャンプリーダーに感謝の気持ちでいっぱいだ。天気はもちろん、他のちょっとしたイレギュラーも楽しさに変えるキャンプをこれからも子供達に届けていきたいと思う。



● 本間 岳 [ほんま かく]

公益財団法人ハーモニィセンター職員

ハーモニィセンターの自主事業であるキャンプ事業やキャンプにかかわってくれるボランティアリーダーの対応を担当。ニックネームは、ボックス。

感じることから学ぶ知恵



上村 礼奈

信州には豊かな自然が身近にあります。園舎を持たない森のようちえんの子ども達は、雨だって関係なしに朝から元気いっぱい走り回っています。むしろ、雨の日はただ走っているだけでも、何だかいつもより楽しそうにも見えます。

自然の移り変わりを身体で感じることで、子どもの五感を磨き、豊かな発想、強い心と身体、慈しみの心を育みます。自然の力や季節の変化を肌で感じ、その日その日を楽しむ子ども達です。

【雨の日】 水たまりを見つけると、ジャンプしてみたり走ってみたり・水の上を跳ねてみたり・ちょっと寝てみたり・そして泳いでみたり、全身で感じる野外の実験室。ダイナミックな遊びが始まります。

大雨の後、普段子どもだけでは持ち上げることの出来ない程の重たそうな大木がぶかぶかと水に浮いていることを発見！その不思議さと面白さに、子ども達の心がぐんぐん動きだす。自然が生む不思議な現象に心惹かれて夢中になり、子ども主体的な遊びが広がります。

雨の中に飛び出し、豊かな感性、好奇心や探究心を培う時間が生まれました。



【風の日】 森の中で折り紙で遊ぼうとすると、風が吹き、たくさんの折り紙がパラパラパラと飛んでいきました。その様子にも、子どもの心が弾みます。

折り紙が飛ばないように、大人が折り紙の上に石を一つ乗せてみる。それを見ていた子どもが目キラキラさせて、次々と折り紙の一枚一枚に石を乗せ始める。折り紙一枚に風になびく

箇所があると、そこにも小さな石が置かれる。風に飛ばされて散らばった折り紙の上にたくさんの小石。それを見た子ども達が「折り紙屋さんだ！」と声を上げました。

風が折り紙を吹き飛ばすという偶発的な出来事で、新しい遊びが生まれました。



日々変化する自然の中で楽しい発見をして、それを共有することの学びが広がります。そして自ずから、比較する力や形を認識する力、体験を言葉にする力や説明しようとする力が育まれていきます。

子どもはどんなことがあってもそれを素直に受け入れ、むしろ楽しみに変えてしまう。そして「楽しかった！」という情動的な体験は体の中に入り、大切な肯定感につながる。自然の中の直接的な実体験が子どもの気づきや主体的な遊びに繋がり「なんでだろう！」「なぜかな？」という問いが生まれ、満足のいくまで創意工夫をすることで、体験が広がります。そしてその体験を通じて、子ども達は物の性質や仕組みなどを感じ取り、気づき、そして、考えたり、予想したり、工夫したりしています。自然の中の偶発的な体験から、生きる力に繋がるたくさんの学びが生まれていると実感しています。

● 上村 礼奈 [うえむら れいな]

「牧場ようちえん ぽっこ」代表

1976年静岡県富士宮市生まれ 保育士取得後 保育園・児童養護施設7年勤務。

2013年（児童発達支援・放課後デイ）感覚統合理論に基づいた乗馬プログラム療育支援。

2017年長野県にて野外保育の関わり 2021年4月より「牧場ようちえんぽっこ」開園。

ユニフォームはレインウェア



田代 浩二

キャンプは子どもたちと、実にさまざまな空の下で過ごす日々です。ときに天候に悩まされることもあります。よりによって…トレッキングやカヌーツアーでの雷雨。テント設営や遠征での土砂降り。雪中泊の吹雪。それから期間中、降り止まない雨…。でも、この厄介な天気が豊かな物語をつくります。

ある夏、6日間のキャンプのこと。出発地・東京は梅雨が明けて夏空がバスを見送ってくれました。向かうは福島県裏磐梯。那須高原あたりから梅雨空が顔を出し、キャンプはしっかり「雨」でスタートしました。

8

ボクらのキャンプは、いわゆる「雨プロ」を用意していません。ベースキャンプにも恵まれて、「雨なら雨の中で」無理をすることなく、できるだけのチャレンジを遂行するスタイルです。それでも、このキャンプは終始シトシト雨、ときにザーザー降りで、さすがにウンザリすることも。「ねえ、どうして今日も雨なの?」「うん、そうだね。よりによって…ね。」

またボクらのキャンプでは「歌」をたっぷり歌います。多いときには30曲以上、このキャンプでもスタートから数曲をみんなで歌いましたが、テーマソングは「にじ」(新沢としひこさん)になりました。「…雲が流れて、光がさして、見上げてみれば…虹が空にかかって、君の気分も晴れて…きっと明日はいい天気」集うときには祈るような感覚で、みんなで「にじ」を歌いました。雨が上がることも、虹が架かることもありませんでしたが、降れば降るほど、子どもたちの声は大きく、明るくなっていく感覚が今でもたっぷり残っています。ボクも「にじ」が溢れるほど好きになりました。

そしてこのキャンプのユニフォームは、もちろん彩り豊かな「レインウェア」。不思議なもので、雨の降らないキャンプでは、ほんの数滴の雨粒で「雨! 雨が降ってきた!」子どもたちはキャーキャー、レインウェアを求めてドタバタ、右往左往です。でもこの雨降りキャンプは、雨がベース。ほんの少しの止み間に薄〜い青空が見えたりしたら、もう大騒ぎです。「晴れた!」「青い青い! ほら青空!」…ひととき「ユニフォーム」を脱ぎ置き、泥靴で森を駆け回ります。キャンプでの歌には「青い空」がたくさん出てきます。せっかくの止み間なのでそんな選曲をしたものの、子どもたちが青空(ほぼ灰色空)の下で「にじ」を大合唱。彼らには虹が見えているかのようでした。

このキャンプ、結局ずっと雨でした。毎日、子どもたちが「にじ」を架ける雨でした。そして、夏空の東京に着いても「ユニフォーム」を纏ったままの子どもたち。キラキラの笑顔で、雨の匂いをたっぷり漂わせながら帰って行きました。

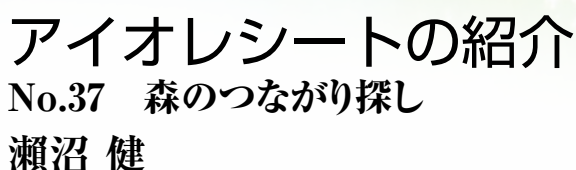


ダイニングに架かる「にじ」

● 田代 浩二 [たしろ こうじ]

NPO 体験学習研究会 ディレクター／体育教師

“新人類”初年度の東京オリンピック生まれ。昨今は“PAPAZOW”としてアドベンチャー教育を展開。「Part-time TAIKU Teacher」「ヤガйкаッター」など、これまでの「体育」「キャンプ」観を打破すべく…ひっそり活動中。



瀬沼 健



私がアイオレ講習会を受講しようと決めた3つの魅力

村里 未帆

1つ目は、最初にチラシを見たときに『ゲームを創作する』ということに魅力を感じました。今まで、先輩たちの行っているゲームを見て学ぶ機会はあったけれど、それを創るということは一度もありませんでした。そもそも、創るという発想が私の中にはなかったの、どんな風に作るのか、わくわくした気持ちで参加を決意しました。

ゲーム創作の時間では、少人数のグループに分かれて話し合い、1つのゲームを作成していきます。手順もきちんと説明があり、講師の方々もサポートしてくださる為、不安なくグループでの話し合いができました。同じグループになる方も経験や職業、年齢も違うため、様々なアイデアがでることで、よりよいゲームになっていきます。最終日には、それぞれのグループが作成したゲームのお披露目があります。複数のグループがあるのにも関わらず、同じゲームは1つもありません。その中から1つだけアイオレシートとして保存されます。しかし、参加した回のゲームはすべてコピーがもらえますので、その時に気に入ったものを使うことができます。また、参加者の方々が進行してゲームを体験するため、様々な人の立ち振る舞いや進行も参考になりました。

2つ目は、『アイオレシート』というゲームをまとめたシートの存在です。体験したことがないゲームでも、ねらいや準備するもの、ゲームの進め方も丁寧に書かれているので、実際に活動の中でも取り入れやすく、他のスタッフとも共有しやすいです。また、シートが1枚1枚、ラミネート加工されているため、野外でも持ち歩きやすく、半永久的に保存が可能です。

3つ目は、『自分が体験できる』ということです。私は普段、子どもたちを対象にゲームを行うことが殆どです。けれど、実際に自分が参加者として体験したことは、ほとんどありません

でした。ユーモア溢れる講師の方たち進行の元、1日たっぷりとゲームを行い、童心に帰ったように楽しみました。自分が経験したものは今でも、あの時やってみて楽しかったから、今度子どもたちと一緒にやってみたいと思います。また、ゲームを達成できない時のもやもやした気持ちや、これからどんなゲームが始まるのかわくわくした気持ちなども経験することが出来ました。講師の方たちのゲーム進行もストーリー設定になっていたり役柄になりきっていたりとそれぞれの個性も際立っていて、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

私は2回参加しましたが、何度参加しても講師の方々や参加者が変わるだけでまた違った魅力のある講習会だと思います。一緒に参加した方や講師の方とも今でも連絡を取り合うこともあり、横の繋がりも広がります。1つでも気になる項目があれば、ぜひ1歩踏み出してみてはいかがでしょうか。



● 村里 未帆【むらざと みほ】
社会福祉法人 樫の木

群馬県出身。育英短期大学保育科卒業。短期大学在学中、障害児保育に関心を持つ。同じ時期に国立赤城青少年交流の家にてボランティアとして活動を行う中で、障がいのある子どもたちと野外活動を行いたいと考える。現在も障害児保育に携わる傍ら、プチ冒険倶楽部に活動を行っている。



「コロナ禍だからこそ」の体験

中谷 梢

2020年9月「国立曽爾青少年自然の家」での「アウトドアゲーム指導法講習会」に参加しました。

曽爾の自然を活かして子どもたちと自然の中で思いっきり遊ぶ。自然とのかかわりを学ぶ。そんな活動を考えていた時、新型コロナウイルス感染症で緊急事態宣言が発令されました。

子どもたちを集めてイベントなどができなくなり、どうしたらいいのか考えていた時に、「アウトドアゲーム指導法講習会」を知りました。

これは行くしかない！と思い参加しました。

講習会では、まず「コロナ禍だからできないのではなく、どうすればできる？こうすればできる！何ができるのか考える。考え続ける。思考を止めない。学び続ける。」というお話を聞いて、なるほど！しかありませんでした。

それまでは、できないことばかり考えていて、事態が収束するまで動かないと考えていた私にとって、やり方や発想を変えれば「できる！」ということを感じさせてくれた大きなきっかけとなりました。

それからの講習会は、ワクワクしかありませんでした。

ゲームは作れる。アイオレシートはアレンジして続けていくことで違うものになっていく。それでいい。それがいい。そして、いいゲームが作れた時は、教えてください。と言ってもらったことがワクワクしかなくて、実際にゲームを作るときも発想は自由にグループメンバーの意見をつなぎ合わせてみんなで作っていく。その全てが楽しかったです。

講習会に行くと、今までの自分の考え方などがガラッと変わり「そういうのもアリなんだ」と固定観念に縛られていた考え方などが自由になっていくような感じがして毎回、新たな自分に出会っています。



自己肯定感も格段にアップしたように思います。

親としても、こういう機会はものすごく貴重で育児にも活かせることがあるということにも気づかされました。

コロナ禍で野外活動が注目されていますが、自然の中での遊び方・マナーを「今だから」改めてイベントを通して楽しみながら学べる。大人数がダメなら小規模なものを何回か開催すればいい。ネガティブになりがちな「コロナ禍」だからこそ、ポジティブに発想の転換で開催できる。そうすると自分がワクワクしていることに気づきました。

この考え方ができるようになったのは、講習会に参加したからこそで、「どうしたらできる？」から「こうしたらできる！」に変える力を身につけることができました。

こうした経験ができるのは、講習会だからこそ様々な年齢の参加者さんとの関わりは、新たな自分探しにもなりました。

今後も、また機会があれば講習会に参加して刺激と新たな自分に出会い、自分の活動に活かせたらいいな。と思っています。

● 中谷 梢【なかに こずえ】

1981年生まれ 鈴鹿市出身 結婚を機に曽爾村へ。

国立曽爾青少年自然の家で勤務。

2020年 Soni Kids Project を仲間とともに立ち上げ活動中。

今日もいい天気ですね



野口 和行

「おはようございます」「今日も暑くなりそうですね」挨拶とともによくかわされるのは、天気まつわる会話です。台風の接近や雷雨など、天気まつわるニュースには人々の注目が集まり、雨や雲など天気まつわる自然現象につけられた名前の多さは、それだけで図鑑になるほどです。「気持ち晴れる」「お天気屋」など天気まつわる言葉で心の状態を表現することもあります。私たちの暮らしと天気は密接に結びついています。

自然体験活動の指導者にとって、天気を知ることとは人と自分の生命を守ることに直結します。最近では気象に関する科学技術も発展し、1時間後の雨雲の様子をかなり正確に予想することができるようになりました。平野さんをはじめとする気象予報士の皆さんのわかりやすい解説も大切な情報の1つです。ただし、こうした科学は自然の一部分を照らし出しているすぎないことも忘れてはいけません。丸さんのように、僅かな可能性の中に自然の驚異が入り込み、それが尊い生命を奪ってしまうことを肝に銘じておく必要があります。菅田さんが実践しているように、得られるすべての情報と経験をもとに、最悪のケースを想定し、勇気を持って安全を確保する判断を行うことが大切になります。

前田さんが暮らす「風と雪の谷、大綱」のように、気象に大きく影響を受けながらも、自然に生かされていることに感謝しながら生活している人たちがたくさんいることにも気付かれます。東西南北に長い島国の日本では、その土地の自然や天気とうまく折り合いをつけながら暮らしていくことも、私たちと天気を深く結びつける大きな要因のひとつなのかもしれません。

キャンプでも、天気は豊かなストーリーを提供してくれます。大雨に見舞われたキャンプ最終日の夜、バスの中みんなで歌ったキャンプソング、レインウェアがユニフォームになったキャンプでは、少しの雨のやみ間にユニフォームを脱ぎ置いて泥靴で走り回る子どもたち、天気に悩まされたキャンプの方が思い出に残っているのは、私だけではありませんでした。「牧場ようちえん ぽっこ」に通う子どもたちは、雨も風も含めて日々変化する自然の中で、それを受け入れ楽しみに変えてしまいます。毎日表情を変える天気だからこそ、私たち人間にとって様々な刺激やきっかけを与えてくれるものであり、雨や荒天時の場合も、どこまで自然の刺激を受け入れることができるかを考えるのも指導者の腕の見せ所です。

今回も私の師匠が登場します。雪の自然を楽しむながら歩く「ネイチャースキー」の師匠です。ネイチャースキーは、雨が降っていると活動が制限されてしまいます。そのことを私たちが残念がっていると師匠はこう言いました。「天気にはいい、悪いはありません。私たちにとっては悪い天気でも、植物にとってはいい天気なのかもしれません。」そして、にっこり笑ってこう言います。

「今日もいい天気ですね。」

もちろん、冒頭で書いた挨拶として、天気の話が出た場合、そう言うことはありません。私だって空気を読むことはできますから。

● 野口 和行【のぐち かずゆき】

慶應義塾大学

(公財)日本教育科学研究所自然体験活動推進委員、野外教育情報編集委員

野外教育情報 2021 第14号 令和3(2021)年9月15日発行

発行所 公益財団法人 日本教育科学研究所

印刷所 株式会社サンワ

Japan Institute of Scientific Research for Education

〒104-0045 東京都中央区築地1丁目12番22号 コンワビル 5階

TEL. 03-6278-7761 / FAX. 03-6278-7683 <https://www.zaidan-kyoiku.or.jp/>

編集委員 野口和行、中丸信吾、金山竜也、鎌田晴美(自然体験活動推進委員会 機関誌・情報部会)